

光の勇者

光の勇者

敦賀市立栗野小学校

六年

柿本峻地
かきもとりょうち



各務原市立緑苑小学校

六年

裏山文香
うらやまふみか
山本理紗
やまもとりさ
小島亜美
こじまあみ
左高菜々子
さだかななこ
瑞慶覧珠加
ずけらんみか
松本未久
まつもとみく

オレの名前は、ゴードン・ハープ。コサツク州という、小さくひっそりとしたところに住んでいる。オレは、どこにでもいる普通の中学生だった……。あの雨の日までは。

その日、オレは家で、準備をしていた。ジュース、ゲーム機、マンガ……。そう。遊ぶ準備だ。幼なじみのベツカム・ベースと、今、オレたちのクラスではやりの、「ドリーム・ファイター」というゲームをするのだ。元は、ベツカムとキヤッチボールをするはずだったのだが、

「雨降ってるし、ゴードン家でゲームしようぜ」

とこうなってしまったのだ。その時、玄関のチャイムが鳴った。

「おいベツカム、開いてんぞ。入ってこい」

玄関のドアが開き、メガネの少年が入ってきた。おっと、ベツカムの紹介、まだだったな。

ベツカム・ベース。メガネで、その顔からして秀才（まあ、実際秀才だがな）。

コイツはすでに彼女がいる。ここでふつうの友達なら、

「オイ、コラてめー。クソツ。オレより先に……」

と怒っちまうとこだが、ベツカムはイケメン秀才なので、

「まあ、しよーがねえか」

となっちまうんだ。それに比べてオレは……ってあれ？

「うおい、ちよつと待てーいっ」

入ってきたのはベツカムだけではなかった。

「な、なんでお前たちが？」

余計に二人入ってきた。マンガ「ドラ○もん」に例えると（そんないじめっ子じゃないが）ジャ○アンとス○おだ。

「なんでって、そこでベツカムと会ってな」

とジャ○アン。ス○おの方は雨でぬれている部分をハンカチでふいている。

まあいい。この二人の紹介をしておこう。

まずはス〇おの方。名前は、マイケル・ドラム。金持ちの息子で、けっこうモテるらしい（あくまでウワサだ。オレは信じていないがな）。勉強そこそこ（オレよりいい点とりやがって）、運動ダメダメ（ハッ！ 勝ったな）。運動のことを助けてやる代わり、いろいろおごってもらえる。

次はジャ〇アン。コイツの紹介は簡単。ただ、筋肉の塊。大男。巨人。以上ハイ終了。おっと、名前言ってねえな。コイツはジョージ・ギター。

そのときいきなりジョージが、

「ゴードン行くぞ、空き地。野球だ」

「オイオイ。だってよ、外は雨……」

コレはオレ。

「イイじゃーん！」

マイケル。

「へッ、やってやろうじゃねえか」

オレのこの一言が、自分の人生の自爆スイッチになるとは、この時思ってもみなかった。

あのことはよく覚えていない。ただ確かなのは、ベツカムの頭に打球が当たったこと、そして倒れたこと。あとの二人が大あわてで救急車を呼びに行ったこと……。その時オレは、倒れたベツカムの横でぼう然と立ちつくしていた。

ベツカムの状態に、医者の人たちも首をかしげていた。一つ、気を失っているのに、体の全ての部分が正常に機能していること。二つ、ボールが当たっただけで気を失ったことだ。

まあとにかく、生きてるってことは確かだ。今は病院の帰り。長い一本道の先に曲がり角がある。その角の先、人生を変える決定的な出会いが待っていた。

「あ、あんた、誰だ？」

そこにいたのは、赤いシミのついた（血かもしれない）シルクハットとスー

ツ、前髪で目が完全にかくれた、やせた男。

「フム。我が輩のことをおまえが知らぬとはな。ゴードン。祖父から聞いておらぬか？ この我輩テロ・バンドの名を」

そこでゴードンの頭の中に、一つの記憶が蘇った。その時、ゴードンはまだ五歳だった。

「じいちゃん。またお話して」

「おお、ゴードン。いいぞ。じいちゃんはな、友達を助けるために、テロ・バンドさんと一緒に悪魔に……お、ご飯のようじゃぞ」

「はーい」

その時はまだ作り話だと、楽しいおとぎ話だと思っていた……。だが？

「あれは本当だったのか？ 悪魔は存在するのか？」

「ああ、するとも。お前の友……ベツカムと言ったか……。やつの魂を連れ去ったのは……」

「たっ……魂を連れ去ったあ？」

「そうだとも。魂を連れ去ったのは……魔界の王、その名の通り魔王だ。魔王は人間を一人、肉体ごと魔界へ連れ去り、その人間になりすまし、ずっと近くにいた。むろん、お前ではない。ほかの友だ。魔王なのは……」

オレは、ごくりとつばを飲み込んだ。★

「……実は……我輩にも、よく分からない」

がくっ……としていいるオレにテロ・バンドは言った。

「お前に言わなければならぬことがある。お前は、祖父に続いて『光の勇者』として選ばれた者なのだ。友を助けるために、旅に出るか？」

「えっええ！ そんなこと言われても……」

オレは、わけが分からなかった。

「では、明日また会おう」

テロ・バンドはそう言い残して姿を消した。

「おい！ ちよつと待てよ！」

まるでゲームの主人公になった気分だ。だがオレにはそんな度胸はないし、『光の勇者』として戦う気もない。でも、助けるにはそうするしかないのか…。

どんよりとした雲が広がる日、オレは再びテロ・バンドと会った。

「さあ行こう。魔王を倒して、友達を助けてみせるよ」

そう言ったものの、手がかりがない。オレは、祖父の話进行思い出していた。

「たしか…：最初はママーイ村に行ったと言っていたような…：」

それを聞いたテロ・バンドがパチンと指を鳴らした。すると、急に冷たい風が吹いてきた。目の前は霧で何も見えない。

「なっ、何が起きたんだ」

驚いていると足音が近づいてきた。

「はんっ、弱そうな男！」

「そんなこと言っちゃだめだよ」

「じゃあ、あんたには強い男に見えるわけ？」

女の方が言い返している（失礼な女だな）。

しばらくすると、声の主である男と女の影が、霧の向こうから見えてきた。

「まあまあ、ケンカはやめなさい。ゴードン、紹介しよう。こっちがニツク・

ビオラ、こっちがエリー・ビオラ、双子の姉弟だ。彼らも『光の勇者』である」

テロ・バンドが紹介した。そうか、祖父もテロ・バンドと一緒に行ったから、オレも誰かに行くことになるのか。

「では、そろそろ行くぞ」

テロ・バンドがまたパチンと指を鳴らした。気がついたらそこは……。

「ここが魔界だ……」

空は赤紫色で、植物は枯れている。じめじめしていて全体的に暗い。人の骨がごろごろ転がり、腐った肉にはハエがたかっている。……変なおいもする。

「わっ!!」

ニックが声を上げてしりもちをついた。ニックが指さす方向を見ると、ガイコツたちがガラガラと音を立てながら少しずつオレたちに近づいてきた。

「ここは我輩にまかせろ」

テロ・バンドが呪文のような言葉をつぶやいた。一体のガイコツが急に倒れ……次々に周りのガイコツも倒れた。さらに驚くことに、みるみるうちに霧が晴れていき目の前には城が現れた（すごい能力だな）。

テロ・バンドが言った。

「我輩はここからは行けない。『光の勇者』だけが城に入ることができるのだ」
城の中は薄暗く、ひんやりとしている（なんだか不気味だ）。オレたちは、奥にある大きく古びた扉に近づいた。おそるおそる扉を開いてみると……。

「ん？ ベツカム、なぜここにいるんだ？」

「はっはっはっ！ よくここまでできたな。我こそは魔王だ」

ベツカムがバタリと倒れこむと、魂が抜けるかのように体から魔王が現れた。

「なに！ ……おい！ ベツカムの魂を返してくれ」

「簡単には渡せぬ。お前たち三人のうち、だれか一人の魂と交換だ」

えっ……オレたちは言葉をつまらせた。

しばらく沈黙が続いた後、オレは言った。

「よし、オレの魂をやるよ」

魔王はその言葉を聞くと、不気味な笑みを浮かべながらオレの胸に手を当てた（魂を抜こうとしているのか）。体の力が抜けていき、目の前のものが二重になつたり揺れたりして見えてきた……。やがて意識が遠のいてきた……。

「やっぱりだめだ、ゴードン！ 魂をとられるなんて！」

エリーとニックが叫びながらオレの手をつかんだ。3人の体がつながったそのとき……目のくらむような明るい『光』がオレたちの体から放たれた。

その光を受けた魔王は急に苦しみだし、地を揺らすようなうめき声を上げながら……真つ黒な灰になって消えていった……。

どのくらいいたただろうか、オレが目を覚ますと、そこはママーイ村だった。オレたちは誰の魂をとられることもなく、戻ってこれたのだ……。

……それにしても、魔王を倒したあの『光』はなんだったのだろうか。